

30周年記念のスローガンは「皆に感謝し感動を伝えよう」

# 赤石太鼓創立30周年を迎え 盛大に記念公演を開催

赤石太鼓保存会は9月22日、文化会館ホールで、「赤石太鼓30周年記念公演会」を開催した。ホールには会員や関係者をはじめとする約350人の観客が集まり、盛大に30周年を祝った。創立時の町長だった佐藤正美さん(90歳)に感謝状が贈呈された。



皆で一糸乱れず



小学生も頑張っています



御諏訪太鼓保存会(長野県)



鼓國雷響 JAPAN(岐阜県)



観客に感動は伝わりましたよ



30周年記念の新曲「川根本町四季の彩り」力強く

## 地域の皆さまに感謝

赤石太鼓保存会は昭和57年に、「地域に活気がある郷土芸能を」という思いから設立されました。現在では、小学生から70歳代まで幅広く、75名の会員で構成されています。

松岡義夫保存会会長は「30年続いたということは、地域の皆さまが赤石太鼓を愛し、育み、支援し続けていただけてきたということで大変ありがたく感謝します」とあいさつをしました。来賓の佐藤町長は「地域の皆さまの熱い声援が、会員の一番の原動力。今後も改革の気持ちを持ち続け、進化を続けてください」と激励をしました。

## 「皆に感謝し感動を伝えよう」を合言葉に

公演会では、30周年記念の新曲「川根本町四季の彩り」をはじめ、アンコール曲を含め11曲を披露しました。ゲスト演奏として、鼓國雷響 JAPAN(岐阜県)と御諏訪太鼓保存会(長野県)も出演し、30周年を祝い、盛り上げました。

また、30周年記念のスローガン「皆に感謝し感動を伝えよう」を書道家の大石宏さんが大書し、ロビーに掲出されました。会場を後にする観客からは「感動して涙があふれた」「これからも頑張って」「応援してるよ」と声が掛けられ、盛況に終了しました。





こんにちは  
おおむらあすみ  
**大村朱澄**  
です!

vol. 1

# 原点回帰



ロンドンでは目標に届かず、苦い思いをしたと話すカヌースプリント競技・ロンドン五輪日本代表の大村朱澄選手。悔しくて、応援してくれた人に申し訳なくて、部屋に引きこもった。でも、この悔しい気持ちが彼女を大きく成長させる。カヌーを始めて15年。いままでに得た経験を生かし、ゼロではなくイチに戻って、前を向いて歩み出した。4年後のブラジル・リオデジャネイロ五輪の一番高い頂を目指して。

**ロンドン五輪後、帰省して接叢湖で練習を重ねていた大村選手。9月12日にインタビュアーに答えただきました。**

**ロンドン五輪レースを振り返ってどのように感じていますか。**

悔しいという気持ちが一番。スタートは悪くなかったのですが、伸ばすところがうまくいかずに、一瞬のうちにおいていかれてしまいました。

レース後は悔しくて、応援してくれた皆さんへの申し訳なさでも、ご飯も食わずに部屋に引きこもってしまいました。でも、世界との差を知り、悲しみはその日に出し切りました。気持ちを切り替えて前を向いていきます。

**世界の印象、そして五輪はどんな舞台だと感じましたか。**

スポーツ選手が目指す特別な舞台。経験できたことは貴重な体験です。次につなげていかなければと思います。選手が4年に一度の舞台で、一瞬に懸けてくる思いを肌で感じました。

**競技を続ける上で、自分を支えるものは何ですか。**

五輪出場を決めて一番報告したかったのは父でした。家族の支えが力になりました。競技を続けられるのも、町民の皆さま

をはじめ、いろいろな人に支えていただいているからこそです。本当に感謝しています。**オン・オフの切り替え方法はどうしていますか。**

実はこれが自分の課題でもあり、苦手な部分かもしれません。トップアスリートはこの切り替えがうまくいと思っています。いままで、とにかく頑張つてやるスタイルでやってきましたが、逆に疲れがたまつて効率が悪いことに気付きました。趣味を見つけようと思います(笑)。

**4年後に向けての目標は。**

五輪には甘さが一切ありません。死にもぐるいでいかなないと勝てないことがわかりました。舞台に立てるか、これからの3年で決まります。すべての面でレベルアップしていかなければなりません。頑張ります。



大村選手が町民の皆さまからの声援と支援に感謝し、今後の思いを含め原稿用紙7枚もの手記を寄せてくれました。来月号から、大村選手のメッセージを紹介します。